

歌舞伎座発 「素人の友、40年」



▲歴代の受信器(左から古い順)



「使いやすい手のひらサイズ」とイヤホンガイドの久門隆社長

歌舞伎や文楽などの上演中、イヤホン付きの無線受信器で、当意即妙の解説を流す「イヤホンガイド」が11月4日で40周年を迎える。1975年の東京・歌舞伎座での初の利用者は、わずか7人。今や伝統芸能などで年間のべ約100万人に利用されている。

伝統芸能年100万人利用

「ドンドン、ドンドン」という大太鼓の音は深山幽谷の梢を吹き渡る風の音を表しています。10月の歌舞伎座では、こんな解説が流れた。配役や物語の背景や小道具、衣裳、独特の約束事などが聞ける。

外国語の解説も

事前収録した解説を微弱な電波にのせ、手のひらサイズの受信器でキャッチ。進行に合わせてオペレーターが、せりふにかぶらないようにタイミングよく流す。現在、全国14劇場で常

備。外国語版も生まれ、海外10余カ国で使われた。解説は伝統芸能に詳しい元アナウンサーら約20人が担当。愛用する東京都内の教員宮良哲也さん(34)は「解説員によって内容が違っても面白く、役立ちますね」。解説員の塚田圭一・イヤホンガイド取締役(81)は、10月分まで最多748本の解説を吹き込んだ。「舞台のリズムによってテキストを変えます」という。考案したのは朝日新聞社員だった故久門郁夫さん。フランス出張の折、機中の仏映画について同僚が耳元で解説したのをヒントにした。76年11月、第1号の演目は「菅原伝授手習鑑」。当初は「歌舞伎の素人に見られる」と抵抗する観客が多かったが、85年の故・十二代

目市川団十郎の襲名披露興行を機に急増したという。久門隆社長(50)は「70年代、ツウの客や専門家から「イヤホン書度」ともいわれた。近年、故・十八代目村勘三郎さんや当代市川猿之助さんのようにテレビでも活躍するスターが登場し、お客さんも増え、ガイドの需要が高まった」と話す。ガイドは使用料700円と保証金千円で利用可能。保証金は返却時に戻る。

博物館でも導入

音声で解説するスタイルは、仕組みは様々だが、博物館などにも広がりが続いている。イヤホンガイドの場合、2008年以降、千葉市の千葉県立中央博物館や三重県明和町の斎宮歴史博物館に登場。スマホと連携した街歩きアプリも開発して、この9月から東京の銀座や築地で実験運用を始めている。(山根由起子)

Tokyo Evening

2015年(平成27年)
10月30日
金曜日 夕刊

朝日新聞東京本社
〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2
電話 03-3545-0131 www.asahi.com



始皇帝と大兵馬俑

東京国立博物館 平成館(上野公園)
TOKYO NATIONAL MUSEUM (Ueno Park)

2/21日 まで開催中

主催：東京国立博物館、陕西省文物局、陕西省文物交流中心、NHK、NHKプロモーション、朝日新聞社、陕西省文物局、陕西省文物交流中心、秦始皇帝博物院



とにかく食べて鍛えて 3面

鈴木亮平さんが巨漢の高校生を演じる「俺物語!!」が31日、公開される。とにかく食べて体重を増やしながら、ジムで鍛えたという。



恐怖と笑いのバランス 4面

「シックス・センス」のM・ナイト・シャマラン監督の新作「ヴェジット」。恐怖とユーモアの「絶妙のバランス」を狙っている。



消えゆく市役所の味 13面

市役所にある食堂の閉店が相次いでいる。職員の利用が減り経営が苦しいためだが、メニューを工夫し人気が出た所もある。